

## なぜ実践的保育研究か

### 現象学的保育研究を目指して

榎 沢 良 彦



今日、現象学なるものが、徐々にではあるが、様々な研究領域に応用されつつあります。哲学的現象学の書物を読んでみても、なかなか理解し難いですし、現象学を保育学に応用しようと思っても、具体的にどうしたらよいかのわかりにくいものです。そこで、現象学に基づく保育研究の基本的あり方を、ここに簡単に述べてみようと思います。

現象学のスローガンである「事象そのものへ」という

言葉は、保育研究においては、研究者自身の経験を重視することを意味しています。現象学的保育研究は、経験を研究の出発点としようというのです。それでは、その経験とはどのようなものなのでしょうか。

現象学で考える経験とは、主体（研究者）が対象—現象学においては本来、対象という言葉は適切ではないのですが、ここでは便宜上使っておきます—と志向的に関わることに於いて、その主体に与えられてくるもので

す。志向的関わりとは、例えば、知覚することであり、行動することです。これらの志向的関わりは、主体が対象と融合することをその本質としているのです。主体が志向的に対象と関わっている時、その主体は、「主観—客観」「主体—客体」の分離を越え、主—客未分離の状態、主—客融合の状態に達しているのです。従って、その時には最早、主体に対置される対象なるものは存在してはいないのです。そう言われてもよくはわからないでしょうから、日常生活での具体例を挙げましょう。

ハイデッガーはよく金鎚を例に出すのですが、彼は、私たちが実際に金鎚を用いて釘を打っている時、金鎚の本質を最もよく理解していると言うのです。目の前に金鎚を置き、それを対象として分析的に見て、その形状や材質を記述しても、金鎚の本質—金鎚とは何か—は捉えられないのです。私たちは金鎚を使っている時、それを分析的に見たり、反省的に捉えたりしてはいないので、金鎚の最も本質的な機能を十分に発揮させてしまっているのです。

同様の事は、今私が文章を書いているこのペンについても言えます。私が一心に文章を書いている時、私の意識にとってペンそのものは主題化されていません。しかし私はペンのペンとしての機能を、書くという行為においてそこに露呈させているのです。そして、私とペンとのこの実践的関わり自体に一度注意の眼差しを向けさえすれば、私はいつでもペンのペンとしての機能を主題的に把握することができます。

このように、私たちはものを道具として使っている時、それと実践的に関わっている時、最もよくそのものの本質を露呈させているのです。こうして主体が対象と実践的に関わっている時に生じてくるものが、現象的保育研究における経験なのです。

保育研究において、研究者が研究すべき子どもと志向的に関わろうとするならば、ほとんど必然的に研究者は保育実践を行なうこととなります。保育現象そのものを研究しようとするならば、尚更、研究者は実践に赴くことになるでしょう。実践は、現象学的保育研究にとって

第一次的位置を占める経験を生む基盤なのです。経験には直接的なものから間接的なものまで、いろいろなレベルがあります。それらはすべて現象学的研究にとって価値あるものですが、何と言っても研究者自身の直接的経験が最も基礎的なものと言えます。

保育者が子どもと実践的に関わっている時—その時子どもの方も保育者と実践的に関わっていることになりま—そこに子どもの本質、つまり子どもの在り方が顕になってきます。保育者はそこに現われてくる本質を直接的に無媒介的に経験しています。子どもの方も保育者の本質を直接的に経験しています。子どもと保育者が互いに実践的に関わり合うことによって、両者の本質が、あるいは保育の本質が自ずと立ち現われてきてしまうのです。

実践とは、物事の本質が自ずと自己を顕にしてくる場なのです。実践において、子どもなり保育なりの本質が、保育者自身に対して自己を露呈してくるのですが、その際保育者はそこで生起していることを反省的に捉え

てはいません。彼は、子どもの行為や表情を一旦言語化し、概念にもたらしただ上で、初めてその意味を理解するというようなことはしていません。彼はそれが生じるままに直接的に理解しているのです。このように、主—客融合状態とは、保育者と子どもが前述語的（前言語的）地平において共生していることなのです。

現象学的保育研究は、この前述語的地平での経験を言語的地平にまで高めることを要求します。そこで私たちは、直接的に生きられた経験を反省的思考にかけ、その本質を概念的に把握するよう努めなければなりません。それでは、現象学的な経験の反省とは如何なるものでしょうか。

現象学的保育研究は、経験を最重視するからと言って、一般的理論や抽象的概念等を排除しはしません。現象学は理論や概念枠を括弧に入れると言いますが、それは、それらを意識から排除し消去することではありません。それらを持たなければ、本質を人間にとって意味ある形に表わすことはできないでしょう。真に本質を理解

したと言えるのは、それを言語的レヴェルにもたらし、意識化できたときなのです。

現象学は生きられた経験を言語的レヴェルで理解する際、その経験を多様な側面から、多様な観点から捉えようと努めます。思考を自由に解放し、ある一つの理論によって視野が狭められないようにするのです。その際私たちは、想像もまた活用します。想像の中で対象化された経験を自由に変容させ、多面的にそれを見るのです。これが「フリー・ヴァリエーション」と呼ばれる手法に当たります。

しかしこれだけでは現象学的研究としては不十分と言わざるを得ません。何故なら、ここまででは、私たちは理論の枠を通してのみ経験を捉えているからです。既有的諸理論を通してのみ経験を見る時には、私たちはその経験を既に出来上がっている理解の中に置き入れているにすぎないのです。そこからは何ら創造的なものは生まれないのです。

現象学的に本質を捉えようとする時、私たちは、ある

経験——例えばあるエピソードや子どものある行為についての経験——を経験全体の中から抽出し切り取ってきて、それを分析することはしません。私たちは、解釈すべき行為も、それを取り巻く具体的状況の中に、生き生きとした経験全体の文脈の中に常に位置づけながら解釈するのです。その行為が自ら本質を露呈してきた生きられた経験全体性と一般的諸理論をつきあわせることによって、その行為の本質を隠蔽することなく、歪めることなく概念にもたらそうとすることです。例えば、ある行為を理論的に解釈したなら、その解釈を経験の文脈の中へと戻すのです。つまり、理論的地平と経験全体性の地平との間を私たちは絶えず往復するのです。現象学が経験を重視することのもう一つの意味がここにあります。

以上簡略に述べたことが現象学的保育研究の根幹なのです。私たちは、自——他融合の前述語的地平(実践)に絶えず身を置きつつ、自——他分離の述語的地平(概念)へと上昇しようと努めるのです。実際の研究においては、くり返される実践の中で、つまり実践過程の中で、既述

した本質の概念化が遂行されていくことになるでしょう。その場合は、時間経過の中で現象学的方法が力を発揮することになります。<sup>(注)</sup>

以上の説明で、保育研究にとって、実践が如何に価値あるものであるのか、如何に重視すべきものであるのか、多少なりともおわかりいただけたのではないでしょうか。保育者の中には、日常の実践において、粗雑ではあっても、現象学的保育研究に近い営みを行っている人もいらっしゃるのではないのでしょうか。少くとも保育者は、現象学的立場から見ると、保育研究にとって最優位の位置にいると言えるでしょう。

(注) 日々の実践過程における、つまり時間的展望の中での現象学保育研究の具体的あり方、およびその構造については、次の論文を参照下さい。①浜口順子「保育における理解の発展過程―現象学的保育研究試論」お茶の水女子大学家政学研究科児童学専攻 修士論文 一九八二(未発表) ②津守真「精神発達遅滞児の治療教育過程の研究―人間の基本的体験と障害をもつ子どもの成長」日本総合愛育研究所紀要第

二十集 一九八四 三四五―三四八頁

〔参考文献〕

- M・ハイデッガー『存在と時間』(上) 勁草書房 一九六〇
- E・フッサール『イデー』みすず書房 一九七九(Ⅰ―Ⅱ) 一九八四(Ⅰ―Ⅱ)
- S・シュトラッサー『人間科学の理念』新曜社 一九七八
- Palmer, R. E.: Hermeneutics, Northwestern University Press, 1969.
- Giorgi, A.: Concerning The Possibility of Phenomenological Psychological Research, Journal of Phenomenological Psychology, Vol. 14, No. 2, pp. 129-169.

(東京大学大学院)